遠ちゃんニュース
令和3年
発行元：えんどうふじお後援会

世界で最も親日の国

台湾

親日の国を大切にしましょう！

ポーランドにモンゴル、インドネシアなど数ある親日の国の中でもとりわけ台湾とトルコは、国民の2人に1人が「日本が好き」と答えるほどの親日国です。

遠藤富士雄は平成7年に和歌山市議会議員選挙で初当選して以来、台湾との交流を推し進め、同22年6月には先輩・同僚議員の賛同を得て日台友好和歌山市議会議員連盟を立ち上げました。現在、高雄市と台南市の議会と友好交流協定を結んでいます。

また、トルコとの交流は平成19年、串本町樫野崎でトゥファン・トゥランル博士が団長を務め、奥様のベルタ・リエド博士と共にエルトゥールル号の発掘調査をされていることを知り、調査の支援に伺ったのが始まりでした。

毎年、2回以上の会合を重ね、今では家族ぐるみのお付き合いで、トルコにも2度訪問し、トゥファン団長のボドルム市のご自宅、所長を務められた海洋考古学研究所にもお邪魔しました。

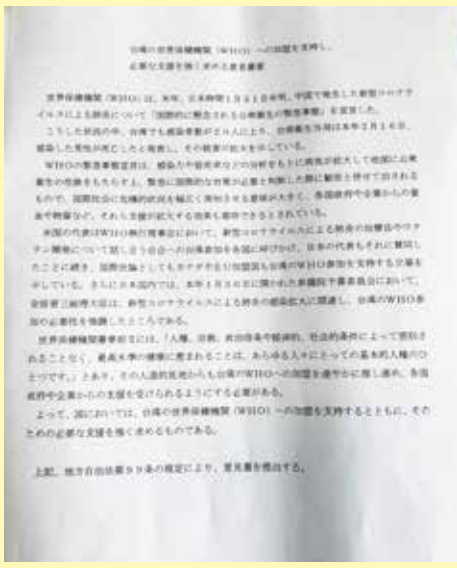
続々と届けられた友からの善意

【5月1日 金曜日】
台湾 高雄市医師公会から日台友好和歌山市議会議員連盟に届きました、
防護服300枚、フェイスシールド60個を尾花市長へ届けました。
翌2日土曜日には台湾　台北市の横山企業有限公司から飛沫感染を防ぐエアロゾルボックス30個が送られてきました。
いずれも医療機関等では大変貴重な医療用必需品です。
尾花市長は台湾のご厚情に感謝し、早急に医療現場に配りたいとコメントしました。

【5月21日 木曜日 和歌山市役所】
台湾日本関係協会（邱義仁会長）から日台友好市議会議員連盟に医療用マスク5000枚が届き、尾花市長に贈呈をしました。台湾からのコロナ対策支援は4度目になります。改めて台湾の善意に心より感謝申し上げます。

ライフワークとしてきた日台交流が目に見える形に

台湾のWHO加盟を後押し



台湾政府から「外交の友貢献賞」

台湾民主化の父逝く

遠ちゃんニュース

令和3年
発行元：えんどうふじお後援会

世界で最も親日の国

これからも支援の手緩めない

トルコ

"エ号"発掘調査から始まった交流

トゥファン・トゥランル氏。75年から米国・海洋考古学研究所（INA）の沈没船発掘調査に携わり、79年に同研究所の一員に。トルコ有数のダイバーで、プロデューサーとして多数の海外メディアのドキュメンタリー番組制作に携わる。07年から、1890年に串本沖で沈んだトルコ軍艦「エルトゥールル号」の発掘調査のトルコ人責任者として活動。

朝日新聞連載のトゥファンBlogに私も登場

朝日新聞　2008年2月8日　朝刊　26ページ　和歌山2

トゥファンBlog@串本 トルコ軍艦調査から <25>

遠方からも支援次々

2008年2月7日

日本の方々の親切に本当に感謝します！……と、いうのも2週間ほど前、田辺市議会のミヤタさんが訪ねて来て、私たちのプロジェクトに寄付してくれたのです。

そして、今日も。今回は和歌山市議会のエンドウさんが、他の議員の方の代理も兼ねて、遠く和歌山市から来て、善意の寄付をくださいました。

「寄付がうれしい」というのではなく、遠路訪ねてくださったエンドウさんやミヤタさんのご足労に感動しています。

そして何よりも重要なのは、エルトゥールル号のプロジェクトが本当にみなさんに支持され、私の目指す真のゴール「トルコと日本の友好の橋を懸けること」に近づいていることです！

私がどのくらい幸せかをここに書くのは難しいですが、みなさんにわかっていただけるとうれしいです。（原文は英語）

エンドウさん（右から2人目）と私（トゥファンさん、中央）たち＝INA提供

アサヒコム・マイタウン和歌山（http://mytown.asahi.com/wakayama/）にも掲載します。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞　2009年1月22日　朝刊　24ページ　和歌山3

トゥファンBlog@串本 トルコ軍艦調査から ⑫

姉妹都市 橋架けたい

2009年1月21日

たいへん特別なゲスト、エルトゥールル号発掘調査のよき友で、大きな支援者が来てくれました。和歌山市議会議長の遠藤富士雄さんです。お会いできてうれしく、忙しい中、来てくれて光栄です。

これまで多くのすばらしい支えがありましたが、遠藤さんは調査に大きな貢献をしてくれました。同市から（ボランティアの）友人たちを集めてくれたのです。彼らの名前をウェブサイト（www.ertugrul.jp）に載せましたが、この欄を借りて遠藤さんとみなさんのサポートにお礼を言います。

私たちは、遠藤さんとある重要な任務をします。同市を、トルコのボドルム市の姉妹都市にする手続きを始めるのです。両国のきずなをより強める重要なステップとなるでしょう。串本町はメルシン市と姉妹都市ですが、もう一つ、和歌山とボドルム両市の間に橋を架けることができたらと思っています。

期待しています。（原文は英語）

エ号リサーチセンターを訪れた和歌山市議会の遠藤富士雄議長（左）＝串本町

トゥファンさんのメールアドレスは（tufan@ertugrul.jp）。アサヒコム・マイタウン和歌山（http://mytown.asahi.com/wakayama/）にも掲載します。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

朝日新聞　2010年1月20日　朝刊　26ページ　和歌山3

トゥファンBlog@串本 トルコ軍艦調査から ⑧

もてなしに触れて幸せ

2010年1月19日

海原の波が収まらず、きょうも海のコンディションに恵まれませんでした。故郷と友人から1万キロ離れていることも、かすかにもの悲しい気分にさせます。しかし、調査団と私の家族は、ここに来られて幸せです。みなさんのもてなしと支援にとても感謝しています。

最も重要なのは、串本町の支援です。プロジェクトの成功に不可欠なものです。

そして、町民のみなさんも。街で出会えば笑顔を返してくれ、多くの方からおいしいミカンをいただきました。

遠く離れた友人たちもそれぞれ支援してくれています。昨日は、遠藤富士雄・和歌山市議がわざわざ来てくださいました。一緒に訪れた北野均、浦哲志、森田昌伸の各市議にも感謝しています。

組員たちは悲しみが、私に日本にしてくれたことは（原文は英語）

歌山市議のみなさんと調査船の上で記念撮影トゥファン・トゥランル氏提供

アサヒコム・マイタウン和歌山（http://mytown.asahi.com/wakayama/）にも掲載します。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

トゥファン夫人のベルタ・リエド博士（考古学）著のエ号ガイド

はじめに　Foreword

2007年、私の夫、トゥファン・トゥランルはプロジェクトリーダーとして、私は考古学の専門家として、トルコとアメリカの研究チームを伴い串本を訪れたのがエルトゥールルプロジェクトの始まりです。一緒に連れてきた娘アダは4歳、息子ボラは2歳でした。このプロジェクトが家族の生活や仕事を大きく変えることになるとは当初予想していませんでした。私たちは訪れてすぐ、串本の人や自然が大好きになると同時に、当初から続く強い絆がうも途絶えることなく、しかも年々強くなっていくことにとても驚きました。このプロジェクトは、現在、私たち家族やチームの親睦を超え、地域全体の一部になったと思います。この本を通じて、あなたの一部にもなるでしょう。

皆さんが歴史を身近に感じながら大島や串本を散策し、エルトゥールル号のことや、それによって日本とトルコの関係がどのように変わったのかを知っていただければ嬉しく思います。このガイドブックは、きっとそのお手伝いができると考えています。

In 2007, my husband, Tufan Turanli (director of the project), and I (as archaeological director), and our two children, Ada and Bora (4 and 2 years old at the time), started our journey to Kushimoto with a research team from Turkey and the United States. We never knew that the Ertuğrul Project would change our lives, professionally and as a family. We immediately fell in love with Kushimoto, its people and nature and were overwhelmed by the strong bonds that existed from the very beginning and grow stronger each year. This project is bigger than us; it is part of the whole community and, through this book, it is part of you as well.

Hopefully you will be able to walk around Oshima and Kushimoto and have the experience of traveling through history and learning about the *Ertuğrul* and how it changed the relations between two amazing countries. If not, we will walk with you through the pages of this book.

7

エルトゥールル号の歴史
Ertuğrul History Facts

オスマン帝国（現トルコ共和国）のスルタン・アブドゥルハミト2世は、明治天皇から大勲位菊花大綬章を授与され、その返礼として明治天皇へ同等の勲章を届けるために、エルトゥールル号が選定されました。

エルトゥールル号はオスマン・パシャ提督指揮のもと、1889年7月14日に首都イスタンブルを出港しました。

11ヶ月にわたる困難な航海の後、1890年6月17日に横浜港に到着しました。

台風シーズンに入ったことを日本側から警告されたにもかかわらず、1890年9月15日、エルトゥールル号はオスマン帝国への帰途に就きました。

1890年9月16日の夜、台風に遭遇して（和歌山県串本町の）大島の船甲羅岩礁で座礁し、船は真っ二つになり海に沈みました。

オスマン・パシャ提督を含む540名の乗組員が命を落としましたが、69名が島にたどり着いて住民に助けられ、手当を受けて食料や衣服を与えられました。

大島の人々は亡くなった乗組員の遺体にも敬意を表し、島に安置する場所を設けました。

最初の慰霊碑は樫野埼灯台の近くに建てられました。

69名の生存者は回復後、2隻の日本の軍艦「金剛」と「比叡」によってイスタンブルに向けて出発し、1891年1月2日、船はドルマバフチェ宮殿前に到着しました。

8

樫野崎の新たなエルトゥールル号慰霊碑は、1937年に建てられました。

エルトゥールル号の遭難は悲しい出来事でしたが、日本とトルコ両国の深い友好の始まりとなりました。

遭難現場での私たちの発掘調査中に乗組員の遺骨が発見され、樫野崎の慰霊碑に埋葬されました。

エルトゥールルプロジェクトは単なる考古学的作業ではなく、エルトゥールル号が担っていた使命を引き継いで日本とトルコの友好関係をさらに発展させていくことにある、そう考えています。

After the Ottoman sultan Abdulhamid II received the Japanese Grand Cordon of the Supreme Order of the Chrysanthemum from Japanese Emperor Meiji, he decided to reciprocate the honor by sending *Ertuğrul* as a similar honor to Emperor Meiji.
Ertuğrul left the Ottoman capital under the command of the Admiral Osman Paşa on 14 July 1889.After an arduous journey of 11 months, the Frigate Ertuğrul made it to Yokohama harbour on 17 June 1890.
Despite the warnings of the start of the hurricane season, *Ertuğrul* began the return trip to the Ottoman Empire on 15 September 1890.
On the evening of 16 September 1890, *Ertuğrul* was caught in a typhoon and hit the Funagora Rocks near Oshima Island. The ship split in half and sunk.
540 sailors lost their lives, including Admiral Osman Pasha. 69 sailors reached the shore and were rescued by Oshima Island fishermen, who treated the injured, gave them food, and clothing.
The people of Oshima also showed great respect for the remains of the *Ertuğrul* sailors and gave them a place to rest on the Island.
The first memorial cemetery was located near the Kashinosaki Lighthouse.
After their recovery, the 69 survivors were sent to Istanbul on two Japanese cruisers, Congo and Hiyei. The ships anchored in front of the Dolmabahce Palace on 2 January 1891.
A new Ertuğrul Monument in Kashinosaki was built in 1937.
The *Ertuğrul* tragedy was the beginning of a strong friendship between the Turkish and Japanese nations.
The remains of the sailors found during the archaeological works on Ertuğrul shipwreck site were buried in the Ertuğrul Monument on the Oshima Island.

The purpose of the Ertuğrul Project is not only archaeological but to continue the spirit of the Frigate Ertuğrul's mission: to develop the Turkish-Japanese friendship further.

9

もっと知りたい コラム

勇気と友情の物語
世界と交流した近代日本

トルコ軍艦エルトゥールル号と親善使節団　この船は、長と英光親善を博した英気軍艦だった。（和歌山・串本町・トルコ記念碑庭）

エルトゥールル号事件

◉トルコの軍艦が遭難

1890（明治23）年6月、トルコ（オスマン帝国）の軍艦エルトゥールル号は、650人の親善使節団を乗せて横浜港に到着しました。日本で初めての帝国議会が開かれた年で、同じように近代国家をめざしていたトルコは日本との友好を強く望んでいました。1年あまりの苦難の航海の末やってきた使節団は、明治天皇をはじめ各界の熱烈な歓迎を受け、9月、帰国の途につきました。

ところが、エルトゥールル号は、神戸に向かう途中で台風に遭い、和歌山県串本町大島の樫野崎沖で難破、沈没してしまいました。587人が犠牲となる大惨事で、深夜、岸に打ち上げられた人々は、灯台にたどり着き助けを求めました。灯台守は万国信号の本を広げ、三日月と星の国旗を決め手にトルコの人であることを知りました。

◉島民の献身的な救助と介護

大島の400戸の島民は、気の毒な異国の遭難者を救助しようと献身的にはたらきました。男たちは海で遭難者を探し、冷たくなりかけた負傷者には裸になって自分の体温で体をあたため、命の灯を甦らせました。女たちは負傷者の介護や食事の世話に不眠不休で奔走しました。島民は非常食用の薪など、持てるもののすべてを提供しました。

事件が新聞で報じられると、日本中から2,500万円に相当する義援金が集まりました。生存者69人は、神戸の病院で手厚い治療を受け、元気を回復して日本の軍艦「金剛」「比叡」に乗って帰国しました。明治天皇は島民の立派な行いを称賛し、それまで救援活動にかかった費用を申し出ることを求めましたが、島民は「当たり前のことをしただけ」と言ってこれをきっぱりと断わりました。明治の日本人の心意気を示すできごとでした。

◉95年後のトルコ人の恩返し

1985（昭和60）年3月、イラン・イラク戦争のさなか、イラクのフセイン大統領は、48時間後以降はイラン上空のすべての飛行機を無差別に撃ち落とすと発表しました。他の国の人々は自国から派遣された特別機で次々と脱出しましたが、日本人とその家族だけはテヘラン空港に取り残されてしまいました。

時間切れ目前となったとき、2機の飛行機が突然やって来て、空港に降り立ちました。日本人救出のための特別機です。215人の日本人は、制限時間のわずか2時間前に無事脱出することができました。

飛行機は、トルコ政府が、エルトゥールル号事件の恩返しのために派遣した救援機だったのです。事件から95年も経っているのに、トルコの人々は明治の日本人が示した真心と献身への感謝を忘れていなかったのです。

274

日台と日土（トルコ）、友情の物語を初めて掲載した歴史教科書